

一人ひとりの実態をふまえた支援のあり方

～自立をふまえて(どの子も共に生き、共に育つ)～

I 主題設定の理由

近年、東山梨地区の特別支援学級数は増えているが、1学級の在籍児童生徒数は、少人数化し、知的・情緒・肢体不自由・難聴・弱視と、多様な障害にわたり、なおかつその程度も重くなってきている。そのため一つひとつの学級が抱える悩みは深くかつ多様化しているのが現状である。そして、在籍・通級及び特別に支援を必要としている発達障害を持つ子どもたち一人ひとりの障害の状況や発達段階、その特性に合わせた支援は、どの学級についても共通した重要な研究課題である。

そこで本年度は、授業実践・学習会・情報交換などを通して、児童生徒の理解と支援方法などを模索し、児童生徒一人ひとりの実態に合わせた支援内容、支援の方法に迫るべく本主題を設定した。

II 研究の内容と方法

1 研究の具体的な内容と方法

- (1) 講師を招いて学習会を行い、それぞれの学習内容について理解を深めたり、地域の施設を見学し、その施設について理解したりする。
- (2) 小部会ごと児童生徒の実態を考えた教材研究などを行い、個に応じた授業作りをする。また、小部会ごと、指導主事などを招いて授業実践を行う。
- (3) 小部会ごと情報交換、実践発表をおこない、障害の理解や対応についての学習会を深め、全体会で各小部会の実践について情報交換し、共通理解を図る。

2 学習会

- (1) サポートセンター「ハロハロ」を見学し、「運営の方法や時間」「子どもたちの様子」「使っている教具や園の施設設備」「利用するには」「施設内見学」「情報交換」などについて学習した。
- (2) 発達障害者支援センター、相談員の小宮山さとみ先生を講師にお招きして、「発達障害の理解と支援について」と題してお話ししていただいた。

3 授業研究

- (1) 山梨市知的障害小部会授業研究 自立活動「なかよくあそぼう」
授業者：日下部小学校 那口 真知子先生
指導者：県指導主事 河西 慶仁先生
- (2) 甲州市知的障害小部会授業研究 算数科「10より大きいかず（20まで）」
授業者：奥野田小学校 松井 仁美先生

指導者：かえで支援学校 伊波 美恵先生

(3) 自閉症・情緒障害小部会授業研究 自立活動「影絵遊び」

授業者：山梨南中学校 小泉 昌彦先生

指導者：県指導主事 岡 輝彦先生

4 小部会研究

(1) 山梨市知的障害小部会

(2) 甲州市知的障害小部会

(3) 自閉症・情緒障害小部会

III 成果と課題

1 成果

- ・小部会に分かれて研究を進めたので、授業について意見が出しやすく、支援の工夫などの学習を深めることができ、内容が充実していた。また少人数なので、日頃考えていることや悩みなども出しやすく、個々の実践を提案することで、主体的に研究会に参加することができた。
- ・他校の先生方の実践の様子や工夫を知ることができ、とても充実していた。
- ・学習会では、地域の施設「ハロハロ」を見学し、詳しく説明していただき大変参考になった。また小宮山先生のお話では、ゲームを介しての疑似体験や、具体例の指導についてなど、発達障害や自閉の子への理解が深められた。
- ・部会ごとに充分な授業案や内容の検討ができ、個々が積極的に参加する意識が高まり、学び合うことができた。
- ・先生方から、様々な支援の方法や工夫が出されたり、指導主事の先生方から、指導助言を受けることができ、実践に役立てることができた。
- ・一人ひとりの実態をふまえた指導・支援により、子どもたちが意欲的に授業に取り組むことが、授業研究を通してわかった。

2 課題

- ・授業案作りの時にも指導助言をしてくださる方がほしい。
- ・小部会の実践事例発表の時間がもっととれると、悩みなどがもっと出せたり、各校の課題についてみんなで考えたりすることができる。
- ・他の小部会の授業を参観することができないので、年間2回の授業研を有効に生かし、2本にするという方法もある。しかし部員全員が授業を見ることの、子どもへの負担も考え、授業研の持ち方を検討する必要がある。
- ・通常学級の子どもたちへの支援や、校内支援体制、各学校の実状や悩みなどについても話題にしていくのはどうか。
- ・今年の小部会の分け方も良かったが、課題別に変えていくのはどうか。
- ・研究会をより有意義にするために、時間厳守で集まり、始められるように一人ひとりが気をつける。

(部長 相澤 京子)